「お話には、作者がいることを知ろう」の解説

監修：黒上晴夫　関西大学総合情報学部教授

　メディアリテラシーの一番の基礎は、提供されたテキスト（映像、写真、絵、文章等）の正確な読み取りです。小学校の低学年では、これこそが国語の重要な目標となりますが、それができて初めてテキストの内容やその背景についての洞察・吟味を導くことができます。表面的なメッセージとは異なったメッセージの存在に気付かせるような体験を通して、洞察・吟味に迫ることがメディアリテラシーにつながるでしょう。

　今回の「本とともだちになろう」の構想は、２つの意味で、メディアリテラシーとしてのテキストの読み取りと関係しています。
　一つは、複数のテキストをプロットという観点から正しく理解することです。これが基礎となります。
　その上で、２つめの少し高度な目標が扱われます。子どもは、本当のことに対してウソが存在することは当然知っていますが、それとは異なるレベル、つまりどれも正当なメッセージであるのに異なるテキスト（プロット）が存在するということへの気づきが促されます。

　このようなことを通して、メディアを通して伝わるメッセージの多様性・多義性の入り口に、低学年の子どもを導く挑戦的な授業となっています。